

調査研究彙報

共同研究

高松塚古墳出土漆塗木棺の修理 美術工芸研究室と平城宮跡発掘調査部との共同調査。昨年度から行なわれている木棺の修理は、本年度は平城宮跡発掘調査部で水抜き処理が行なわれ、引続いて財団法人美術院に移され、復元的修理が施工された。

美術工芸研究室

日本美術院彫刻等修理記録の刊行（特別研究） 本年度は同書のVとして、奈良県下の主に郡部の彫刻等49件に加え、修理記録が完備していない分（主に明治30年代の修理）47件をとり上げて整理、研究を行ない、図解186頁、解説125頁、写真115頁にわたる記録を公刊した。なお奈良県分は本巻（全5巻）をもって完結した。

白杵磨崖仏の復元的研究（科学研究） 昨年度に作製した同磨崖仏古園、山王山の二群の実測図をもとにして調査を行ない、現状の損傷状況を確認し、復原可能な箇所、欠損箇所など5段階に分けて図示する作業を行なった。（星山・田中義雄・木全・伊東）

岐阜県下の彫刻等の調査等 県教育委員会の依頼により、県下関市、春日村その他の調査を4回にわたり行なった。ことに本調査では今日まで知られていなかった平安時代から鎌倉時代の木彫像8軀が確認された。この他、奈良県および周辺地区の調査として奈良市隔夜寺、舞鶴市多称寺などの彫刻等の調査を行なった。

薬師寺西塔跡出土塑像断片の調査 昨年度に平城宮跡発掘調査部によって発掘された西塔塑像群の断片約2,000点の整理調査を行ない60%を完了、54年度も引続いて行なう予定である。

「日本木彫展」随員として 国際文化交流基金とヨーロッパの3都市（ケルン、チューリッヒ、ブラッセル）主催の同展の随員として53年12月12日から54年3月31日まで出張した。ケルンとチューリッヒで陳列準備と展示中の説明に従事した。（田中義雄）

建造物研究室

桂離宮建築調査 桂離宮古書院・中書院の解体修理に伴う調査で、後世の修理による変更箇所および当初の建築技法等について、昨年度以来宮内庁に協力してその解明にあたった。また各種部材の材種についても検討を加えた。（工藤・光谷）

旧犬養家住宅調査 岡山県が実施した解体修理に伴う調査で、建築当初形式への復原調査や修理による変更個所の調査を行なうとともに、解体修復工事について工事中逐次指導を行なった。なお旧犬養家住宅の修理工事は工期終了し、昭和54年6月1日竣功をみた。（工藤）

文化財建造物修理用資材需給等実態調査 文化庁が行なっている調査で、本年度は鉾物性材料について行なわれ、当研究所は愛媛、岡山、奈良3県の粘土瓦の生産関係の調査を行なった。愛媛は一般の粘土瓦については有数の生産県であり、岡山は近年生産県より消費県に変わった。奈良は一般粘土瓦についての生産量は少ないが、質がよく文化財関係の瓦の全国シェアは一位で

ある。(吉田靖)

第一回集落町並保存対策研究集会 1979年1月29・30の両日、平城宮跡発掘調査部会議室において開催された。この集会は、集落町並保存問題に関係する行政担当者や学識経験者が、相互に情報の交換を行ない、それぞれの地区に適合する保存施策の策定について研究協議することを目的とする。今後3回にわたり開催する予定で、本年度はその第一回目にあたる。

今回は町並調査が行われた市町村の担当者と調査者を中心に約90名が参加した。第一日目は文化庁から国の施策についての経過と現状について、また重要伝統的建造物保存地区の選定を受けた檜川村、白川村、京都市、萩市から保存事業の現状と問題点について報告がなされた。第二日目は、「町家と町並について」と題する白木氏の基調講演の後、質疑討論に入り財政・税制・組織といった行政の問題や保存の方法論やデザインの問題について活発な意見が述べられた。討論内容は多岐にわたっており、個別事項について一層研究協議することが望まれた。

歴史研究室

東大寺文書調査 文化庁の委嘱によるもので1974年度からの継続調査。未成巻文書第3部第10(請取状)709号より、第3部第12(雑)441号までの調書作製を終えた。また写真撮影は第1部第25(雑)250号より、第3部第4(請文)までを完了した。また『東大寺文書目録』第1巻(第1部第1伊賀国黒田庄～第23大和国清澄庄)を刊行した。今後各年度1冊ずつ刊行の予定である。

興福寺典籍古文書調査 従来よりの調査の継続。5月、10月。第16・35・43・44・48～52函の調査を完了した。第35函には鎌倉時代の紙背文書があり、また第53函(調査未了)の『八省唐名』は令制・唐名官職の音読法を知る上での好資料である。

西大寺典籍古文書調査 従来よりの調査の継続。2月。第39・40・41・45・46・50・63函の調査を完了した。江戸時代書写の聖教類が大部分を占めるが、一部に鎌倉～室町時代の書写にかかものも発見された。

仁和寺典籍古文書調査 1958年度以来の継続調査。3月。塔中藏階下書籍類第196・197・198・201・202・204・205函の調査を完了した。また御経藏第150函収納の仁和寺文書の調書作製(未了)ならびに『古筆手鑑』を調査した。

その他の調査 東寺観智院聖教調査(協力)、5月、9月。高山寺(協力)、7月。醍醐寺、8月。当麻寺奥院、8月。石山寺(協力)、8月、12月。陽明文庫、12月。東京大学史料編纂所(島津家文書)、1月。

中華人民共和国研修旅行 「日本『中国歴史・文物』研究者友好訪中国」の一員として10月6日から20日まで研修旅行を行なった。北京—西安—洛陽—鄭州—上海のコースで巡り、西安碑林をはじめ、各地で貴重な遺物、遺跡にふれることができた。(田中^忠・狩野)

平城宮跡発掘調査部

各地遺跡出土遺物の保存処理 次の木製品・金属製品の調査研究を行なった。大阪府東奈良遺跡の丸木杵、佐賀県千塔山遺跡の青銅製鋤先、石川県寺家遺跡の金属製品一括。寺家遺跡は律

令祭祀の遺跡としては沖ノ島・大飛島・神島に次ぐ発見である。(考古第一調査室)

伯耆国分寺の調査 環境整備に伴ない南門の発掘調査を行なった。南面の築地塀と外濠の一部を検出したが南門の検出にはいたらなかった。8月～9月。倉吉市教育委員会。(佐藤・金子・中村雅治・巽)

伯耆国庁の調査(第6次) 内郭政庁域では3間×2間の南門と築地塀を検出し内郭の規模明らかにした。西外郭では西方官衙と呼ぶ溝で区画した建物群を検出。国庁は8世紀後半から10世紀初頭まで存続し、全体で4時期の造替を認めた。詳細は「伯耆国庁跡発掘調査概報(第5・6次)」参照。8月～10月。倉吉市教育委員会。(佐藤・金子・中村雅治・巽)

法隆寺所蔵瓦の調査 今年度は、大正14年の防災工事で発見された瓦を中心とした第2次調査と、寺所蔵瓦全型式の代表例を中心とした第3次調査を行なった。なお、法隆寺秋季特別展観「法隆寺古瓦展」の展示および図録作成に協力した。(考古第三調査室)

美濃国分寺環境整備 大垣市の依頼により、今年度は周辺築地・僧房復原工事・池造成工事の実施計画と指導を行なった。(安原・田中哲雄) 1978年4月～1979年3月

紀伊国分寺環境整備 和歌山県の依頼により、紀伊国分寺環境整備基本計画の作成を行なった。(田中哲雄・加藤允彦) 1978年4月

三ツ塚廃寺環境整備 市島町の依頼により三ツ塚廃寺整備の基本計画・実施設計の指導を行なった。(安原・田中哲雄) 1978年10月

伯耆国分寺跡環境整備 倉吉市の依頼により、発掘調査で明らかになった講堂・金堂整備工事の指導を行なった。(田中哲雄) 1978年9月

熊野古道環境整備 今年度より始まった歴史の道整備事業の一環で、中辺路町・熊野町の依頼により基本設計・実施設計の指導を行なった。(田中哲雄・渡辺・光谷・本中) 1978年10月

江馬氏庭園遺跡調査 神岡町の依頼により江馬氏の館跡・庭園跡の発掘調査の指導を行なった。(安原・田中哲雄・加藤允彦) 1978年7月～1979年3月

文化財の保存に関する国際会議参加報告 1978年、9月から10月にかけて文化財の保存に関する二つの国際会議が開かれた。オックスフォードでの国際歴史美術資料保存研究会・第七回世界大会(The International Institute for Conservation of Historic and Artistic Works-IIC)と、ザグレブ(ユーゴスラビア)で開催された国際博物館会議・第五回保存委員会(The International Council of Museums for Conservation-ICOM)である。前者では絵画・工芸品における木材の、後者では出土木材、金属器、石造品などに関する保存法の研究発表および討議がおこなわれた。沢田は漆塗木製品のアルコール・エーテル法による保存法のレポートを提出し、平城宮跡出土の木簡の保存法について発表した。(沢田)

文化財の保存修復に関する国際シンポジウム(第2回大会) 東京国立文化財研究所が主催する同研究会は第1回のテーマ「木材の保存」に次いで、「文化財と分析化学」をテーマに1978年11月27日から29日の3日間おこなわれた。カナダ、西ドイツ、アメリカ、フランス、韓国からの

6人に加えて10人の日本人研究者が発表した。席上「青銅製品の非破壊分析」と題して、皇朝十二銭と青銅鏡の蛍光X線分析について報告した。(沢田)

中華人民共和国研修旅行 「関西文物保護青年職員友好訪中団」の団長として7月5日から21日まで、北京—安陽—洛陽—西安—広州のコースで遺跡視察旅行を行なった。中国国家文物局の関係者との交流も含め、忙しいながら貴重な体験を得た。(町田)

中華人民共和国研修旅行 「京都造園関係者友好訪中団」に参加した。11月2～12日。広州—上海—南京—蘇州—広州と巡り、特に蘇州では滄浪亭他多くの庭園を見学できた。なお渡辺康史も休暇を利用してこれに参加し、共に貴重な経験を得た。(田中哲雄・光谷)

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

紀寺跡の合同調査 榎原考古学研究所と合同で9月18日から11月24日まで実施した。寺城南限を画する掘立柱列と藤原京八条大路北側溝を検出した。

山田寺の礎石調べ 山田寺の発掘に関連して、地元古老の話をもとに、7月4日大阪の藤田美術館敷地で礎石調べを行なった。その結果、山田寺のものと思える塔四天柱石1個、金堂礎石6個を確認した。現在山田寺金堂跡には2個があり、残り4個の確認が今後の課題である。

飛鳥資料館

模造製作 本年度は、高松塚古墳出土の大刀飾金具、同海獣葡萄鏡、同棺飾金具、城陽市久世廬寺出土の銅造誕生仏、岡寺の銅造菩薩半跏像、千葉龍角寺の仏頭の模造製作を行なった。

埋蔵文化財センター

研究集会「広域火山灰と考古学」 54年3月20日。研究所外から20名、所内から15名の参加者を経て、平城宮跡資料館会議室で開催した。都立大町田洋氏(広域火山灰研究の現状と問題点)、群馬大新井房夫氏(広域火山灰の同定とその問題点)、北海道教委森田知忠氏(新千歳空港の調査から)、東京都教委小田静夫氏(武蔵野・相模野・下総台地の先縄文遺跡の場合)、鹿児島県教委新東晃一氏(九州縦貫道の発掘調査から)、神戸教育研前田保夫氏(神戸市のアカホヤ火山灰層と大阪湾の始良火山灰層について)、秋田県教委富樫泰時氏・岩手県教委瀬川司男氏(歴史時代の十和田火山灰層について)、群馬県教委能登健氏(群馬県下における火山灰層について)の諸氏の報告をもとに、火山灰研究の必要性が充分認識された。

環境整備担当者会議 54年3月19日・20日。51年度福井県開催以来4回目のこの会議は、今回は当研究所の主催で、埋蔵文化財センター研修棟で行なった。所外からは文化庁、福井県、宮城県、広島県、福岡県の常任担当者の他、近畿地建飛鳥国営公園出張所、奈良、京都、大阪、三重、滋賀、兵庫、岡山の各府県担当者等の参加も得て、活発な意見交換が行なわれた。主な問題点は、整備内容と周辺住民生活との調整、整備前と後の管理問題などであった。

周防国衙跡の調査 国衙2町方域の環境整備工事に先立って、国衙四至の確認調査をおこなった。調査は西北隅・東北隅・東門推定地および西南隅の順に、8月から9月まで実施した。前回(昭和36～39年)のトレンチ調査では2町方域を築地土段が囲んでいたとの判断が下された。

今回は前回のトレンチを含めて面的に発掘したが、上の判断は積極的には支持し難いという結果を得た。(山本・毛利光・川越)

下野国府跡発掘調査 下野国府跡推定地の一つ大房地区の調査。7間×5間の孫廂付建物、5間以上×4間の二面廂付建物など10世紀頃の建物群を検出した。国衙の官衙建物の一部である可能性も強い。栃木県教育委員会。10月。(山中)

上原遺跡発掘調査 ほ場整備事業に先立って遺跡の性格の解明と範囲確認を目的とした調査。二面廂付建物など大規模な掘立柱建物群を検出。瓦も少量出土し、地方官衙または寺院遺構である可能性が強い。鳥取県気高町教育委員会。11月。(山中)

美作国分寺跡の調査 岡山県津山市。11月28日から12月12日の間、発掘調査の指導を行なった。調査の結果、金堂の遺構は検出できたが塔跡は確認し得なかった。調査は昭和54年度も続けられる予定であり、全容の解明と保存の確立が待たれる。(岩本正二)

福本遺跡の磁気探査 縄文時代から奈良時代にまでわたる遺跡の範囲確認とその性格を知る調査。磁気探査は灰層のみが知られる瓦窯の窯体確認、及び周辺に窯体が存在するかどうかを調査し合計三基の平窯を確認した。兵庫県神崎町教育委員会。3月。(西村・岩本圭輔)

南多摩窯跡群の磁気探査 須恵器窯跡群の分布調査の一環として窯体確認及び竪穴住居または工房跡の探査を目的に実施。1基の窯体と窯体の可能性がある部分と、工房跡かとみられる正方形の4～5m大の磁気異常を発見した。東京都八王子市教育委員会。1月。(西村・山本)

具志川島遺跡崖葬人骨および炉跡取り上げ 沖縄県伊是名村。人骨はアクリル系合成樹脂、炉跡はイソシアネート系合成樹脂で強化したあと、発泡性硬質のウレタンフォームで遺構全体を梱包・保護して取り上げた。(秋山)

亀井遺跡出土木棺取り上げ 大阪府八尾市南亀井町。古墳時代中期の木棺が出土し、漆塗短甲、草摺、鉄刀および靱などが共存している。木棺全体を硬質ウレタンで梱包し取り上げた。各種遺物はその材質に合わせて保存処理方法を検討・指導した。(町田・沢田・秋山)

日韓青銅器文化シンポジウム 5月23日～27日。韓国ユネスコ委員会が、ユネスコ本部の協力を得て23・24日に開催した「韓日青銅器文化学術会議」に出席した。日本からは杉原莊介氏、金関恕氏、西谷正氏の計4名。機会を得てソウル・慶州を巡り見聞をひろめた。(佐原)

中央アジア考古学調査 8月20日～10月30日。京都大学の同調査に参加。1ヶ月はアレキサンダー時代の砦スカンダル・テベ(カーブル近郊)の発掘調査、1ヶ月はバーミヤン石窟群の写真測量という慣れない仕事に従事。アフガニスタン一国内の70日間であった。(安原)

中華人民共和国研修旅行 54年2月15日から3月20日。「日中友好学術文化訪中団」の一員として、新疆ウイグル自治区のウルムチ、トルファン等シルクロード(北道)上の諸遺跡を訪れたほか、蘭州・西安近郊の遺跡、博物館を視察した。(山本)